慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	R・H・S・クロスマン著 小松春雄譯『政府と人民』
Sub Title	R.H.S. Crossman : Government and the governed : a history of political ideas and political practice, 1952, translated by H. Komatsu
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1955
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.28, No.12 (1955. 12) ,p.49- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19551215-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

R・H・S・クロスマン著
小松春雄譯

『政府と人民』

一

本書は Richard Howard Stafford Crossman : "Government and the Governed—A History of Political Ideas and Political Practice—London Christophers 1952 の邦譯である。

著者クロスマンは、オックスフォード大學卒業後、一九三〇年から三七年にわたる七ヵ年間、母校のニュー・カレッジのフェロー、チューターを勤め、政治哲學の研究と並行して教壇にも立ってい

た。更に三八年以後、ニュー・ステーツマン・アンド・ネーション紙に携り、傍らオックスフォード市會の勞働黨の指導者として地方議會に活躍し、今次大戰中は連合國派遣軍最高司令部心理作戰課次長として活動し、現在は勞働黨下院議員、ニュー・ステーツマン・アンド・ネーション紙の副主筆を勤めている。

本書を一讀してみるに、いかにも著者の閲歴に相應した問題の處理であることが分る。Political Idea と Political Practice が相互に織りなされ、經と緯との兩視角がバランスして問題點をクローズ・アップしている。

日本版への序文に「理念は非常に危險なものであるというのは、本當である。理念は、善用されるならば人間を解放することができる。しかし、理念は、むしろ人間をしばしば奴隷化している。そして、自由主義的な諸理論が、遺憾ながら、たびたび、權力政治家によつて純粹理論的な脈絡から引き離されて、自由の破壞を正當化するために使用されてきたことは、小著の說こうとしたことの一つである。もし、理念が、人間を解放すべきであつて、奴隷化すべきでないとするならば、理念の眞の目的を實現するために注意深く設計された制度に、奉仕しなければならない。

そして、このためには、現代のすべての國々において、民主政治の理論の知識と實際の知識とを結合させる政治的指導が必要とされるのである。」と說いている。この著者の言葉によつて覩えることは、政治的世界においては、理論と實踐が極めて密接な問題であり、これを包括している政治的イデオロギーはデモクラシーをおいてほかにないということである。それと同時に、クロスマンが「歴史の流れは、われわれの支配を越えたものであり、しかもそれは、われわれの本質上缺くことのできないものであるから、われわれは、常にすべての計畫が相對的であることを念頭におかねばならない。」（五頁）と歴史的相對主義を表明するとき、著者もまたイギリス傳來の經驗論哲學にその世界觀の根柢が潛んでいることを感じせしめられる。

本書の內容を紹介するにさきだち、本書の邦譯に努力を傾注された小松春雄教授について紹介しておきたい。譯者小松氏は、現在主として中央大學において教鞭を執つておられ、政治史家として活躍されている。主要著書は、「近代市民國家形成運動を、資本主義の發展と結び合せつつ、デモクラシー運動の面に於て捉えよう」と試みられた「近代歐州政治社會史」や、その他論文・共同執筆書等があり、斯界で活躍されている少壯教授の一人である。本書が、小松春雄教授によつて譯出されたことは、まことに人を得たというべく且又廣く日本の政治學徒に讀まれることは意義深いものがあると思われる。

二

本書の構成を一括して提出してみるならば、第一章　序說、第二章　近代國家の起源、第三章　イギリス革命、第四章　アメリカ革命、第五章　フランス革命、第六章　イギリスの產業革命、第七章　民族的自由主義と帝國主義、第八章　社會主義とロシア革命、第九章　ファッシズム、第十章　世界政府か全滅か、の十章でまとめられている。

筆者の手許に、本書の一九三九年の初版があるが、それには、第九章のファッシズム革命までで、第十章はこの一九五二年版に新たに附加されたもののようである。クロスマンは、その序説で次のようなことを述べている。すなわち、「政治理論は、絶對的な科學ではありえないことは明らかである。それは、人はいかに生くべきか、また國家はいかに組織さるべきかということを、斷定的に、案出したり、規定したりすることはできない。政治理論は、現存の自然の條件と社會環境とを研究したのちで、生活を規制する手段・方法を示唆できるだけである。」から「政治理論を抽象的に研究することは、あまり利益がない。人は、人間社會の複雜な構造から、政治と呼ばれる小さな生活の一片、あるいは國家と呼ばれる組織の斷片を切り離すことができないし、また切り離してそれを理解しようと望むこともできない。」のである。それ故、「政治を時代の生活の一面として、また政治理論を時代の思想の一面として見るようにしなければならない。」といつている。

この思考はさきにのべた歴史的相對主義であり、經驗論哲學の立場にほかならないといえよう。そして、クロスマンによれば、政治理念を研究する效用は、二つの問題からなる。

一つは、「政治理論は、上品な論理の小包ではない。」のであり、「實際に民衆を動かしている理念は、明快な理論ではなくて、宗教・經濟・社會倫理並びに個人的な好惡の驚くべき混合物」なのであるから、「歴史に眼をむけて、……現在活動中の諸力を、研究」する必要があるということである。

第二點は、「政治理論は、世論の無秩序な混亂または政治家の行爲に注意を集中するのではなく、社會の問題を理解し、かつ人間關係を規律する最上の方法を考えだそうとした偉大な思想家たちの思索に注意を集中するのである。」が「偉大な思想家の理論が、實際に世論を形成するにあたつて有力になるべきであるとすれば、その理論は、ほとんど原型を認知できないほど單純化され、組織化されねばならない。」のが實情であるから、「偉大な思想家の著作を讀むのは、單に彼らの生きていた時代を理解するためではなく、明晰に考えることができるように自己訓練をするためである。」そして、かつまた、「偉大な政治理論家の研究と有力な政治理念の研究とをそれぞれ明瞭に區別することを覺えておきさえすれば、この二つを一諸に行うことができるのである。」という二點である。この基本的な態度、換言するならば、著者のユニークな政治思想史觀に基づいて本書は執筆されているといえよう。

第二章「近代國家の起源」において、近代政治の種々雜多なタイプを分析する前提として、まず民族國家自體の研究を必要とする旨述べ、「民族國家は、資本主義・ナショナリズム・デモクラシー等々の新らしい酒がそそぎこまれた壜である。これらの酒の奇妙な混合が、民族國家を爆發寸前にまで緊張させている。しかも民族國家はこれらの酒を全部包容する器であると主張している。歴史的には、民族國家は、近代的現象の最初のものとして出現した。論理的には、民族國家は、多くの政治理論や實踐が足場をおいてきた土臺である。」(一四頁)といい、この民族國家は、原理によつて導かれたものではなく、一三世紀以降四・五世紀の間に、ヨーロッパに生じた經濟的、社會的變化によつて生じたものであるから、民族國家

の本質理解のためには、それを派生せしめた社會・經濟構造の理解が前提であるとして、中世ヨーロッパ社會の秩序を說き、この中世社會秩序の崩壞過程、ひいては近代國家社會の發現過程において、その時代的要請としてのニコロ・マキアベリの存在を說く。君主論のうちに、伏線として潛んでいる彼の哲學は、㈠各國家には主權が存し、㈡權力の管理は主權を正當化する根據である。という二問題に要約しうるという。

この民族國家哲學を生誕せしめた社會的・經濟的變動は、クロスマンによると「海外の新らしい富の源泉の發見・國際的金融の發展・農業經營手段や財產法における革命並びに宗敎改革」の四點であるという。

第三章イギリス革命においては、まずその背景に觸れ、イギリス革命の本質にアプローチするには、Leviathan と、Civil Government を比較對照するのが一方途であるといい、トーマス・ホッブスとジョン・ロックは同時代人ではあるが「彼らの最も有名な著作の出版の日附は、わずか三十九年の相違があるだけである。しかもこの相違は、時代の相違であり、またほとんど文明の相違でもある。すなわち、〈リヴァイアサン〉Leviathan は、ルネッサンス最後の偉大な所產であり、〈市民政府論〉Civil Government は、啓蒙時代の最初の先驅者である。」（五七頁）とこの二人のコントラストを指摘する。第四章アメリカ革命においては、「アメリカ植民地の社會構造は、貴族階級の缺如・擴大する邊境の存在・非國敎徒諸派の寬容という三つの特徵を除いては本國のそれとは基本的には異つていなかつた。それゆえ、革命は帝國主義の暴政から逃れんとする自由な平等主義者の社會の叛亂ではなかつた。」（九三頁）といい、連邦憲法について語り、「憲法制定會議の仕事は、十八世紀の精神の最高の表明であつた……主權神授說に依存するでもなく、またリヴァイアサンの力と欺瞞とに依存するでもなく、彼らは單に人間の利害のバランスにもとづいて統治機構の法を制定した。」（一〇〇頁）と、理性の時代のシンボルとしてアメリカ憲法を讃えている。

三

第五章フランス革命では、まず「革命の展望」を試み、「アンシャン・レジームと反抗」を說いて、運動展開の跡を辿り、ルソー、並びに「社會契約論」を解說して、「ルソーがフランス革命の豫言者であつたとすれば、ペインはフランス革命の最も有能なパンフレット作者であつた。」（一一八頁）と述べて、トーマス・ペイン、および彼の「人權論」を經濟理論、政治理論、國際關係等の諸觀點から詳細に分析する。ついでナポレオンの業績を「彼の樹立した體制の安定性は、それがブルボン反動・民主革命・ナポレオン三世の冒險並びにその一八七〇年の敗北の重荷に堪えて、ついに第三共和政のブルジョア民主憲法に無傷のままで現れたという事實によつて示されている。」（一三〇頁）と述べている。

以上でイギリス・アメリカ・フランスの政治革命を、歷史的背景と登場する政治思想に架橋しつつ展望したクロスマンは、次いで、第六章ではイギリスの產業革命を考察する。

當初に、工業主義とデモクラシーの觀點から出發し、「工業主義

とデモクラシーとの關係については、つぎの三つにわけて考えられる。すなわち、(1)すでにブルジョアジーの傳統が確立されていた國々に對する工業主義の衝撃の歷史、(2)中世の崩壞後、民族國家となつたが十九世紀の初めまでにブルジョアジー指導のもとに民族的統一を達成しなかつた國々に對するブルジョア的理念並びに工業主義の衝撃の歷史、(3)ヨーロッパの中世的傳統をもたなかつた國々――たとえば、トルコ、シナ、日本――に對するブルジョア的理念と工業主義との衝撃の歷史、がこれである。」(一三四頁)として、これらの類型においてはそれぞれ異質的な政治理念と發展過程が存在することを指摘する。すなわち、(1)の型では、民主的理念の繼續性がみられ、(2)の型では、全體主義的國家形態が現れ、非合理性が支配的であり、(3)の型では、一般的に論議しえないとしている。

更にクロスマンは、ジェレミー・ベンサム、ジェームズ・ミル、ジョン・ステュアート・ミル等の思想構造を解明し、功利主義は、「獨創性のない、かつ矛盾した理論であつた。したがつて、功利主義が支持されたのは、その內包する論理的一貫性によつてではなくその支持者たるミドル・クラスの政治的要求によつてである。功利主義は、まさにそれが、新らしい工業主義にとつて土地貴族を攻擊する際に利用價値があつたということだけで、勢力をもつていたのである。」(一四〇頁)ときめつけている。更に興味深いことは、クロスマンが、イギリス產業革命を論ずる段階として、「宗教と資本主義」の項目を設けていることである。嘗て、マックス・ウェーバーが、「Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus」において、資本主義の展開とプロテスタンティズムの相補關係を問題視したが、クロスマンも「實業家は、節約・勞働並びに慈善を、新らしい資本主義の倫理的基礎として唱道し、快樂を最大量にする功利主義的欲望からではなく、峻嚴な義務感にもとづいて、自己の富を蓄積した。實業家は、新らしい工業主義の中に、社會の幸福を增進するための非常に有力な武器があると考えたので、自己の事業の發展は、神の召命であると考え、また自己の使用する勞働者の苦惱は、變更しえない神の計畫の一部であり、勞働者の困窮はただキリスト教的慈善によつてのみ、やわらげられると考えた。」(一五四頁)といい、さらにつづけて、「奴隷廢止・傳道十字軍の復活・幼年勞働者使用に對する攻擊・公衆教育の普及並びにその他のもろもろの運動は、政治的信條からでなくて、キリスト教的な共同體意識から生じたものである。」(一五六頁)と說いているが、このような考え方は、ウェーバーの思想のエピゴーネンかと思われる。

第七章民族的自由主義と帝國主義においては、前章までに先進資本主義國家を考究したクロスマンは、眼を轉じてドイツ、イタリー並びにオーストリ・ハンガリー等の後進國家を對象としている。「これらの諸國の自由主義は、全くちがつた線に沿つて發展し、西歐のブルジョアジーの運動には見られなかつた諸問題に直面することとなつた。この相違は、われわれが自由主義的という名稱のもとに分類している主要な特徵を要約してみると、一層明瞭になるであろう。」(一六五頁)として、イギリスのそれとの對比において問題點を、スクープ・アウトしている。

クロスマンの取擧げた問題點は、四つ存在する。第一には、イギ

リスのデモクラシーは、民族的統一の堅固な枠内で展開したのであるが、ドイツなどは、「民主的共和國を夢想するにあたつては、まずその境界と宗教とを決定しなければならなかつた。かくてドイツの民族的デモクラシーが、どんな形をとろうとも、それはドイツ人の胸中に激烈な反感を呼び起さざるをえないし、またさらに民族自決を欲していたスラブ系の少數諸民族を包含せざるをえなかつた。」（一六七頁）という、デモクラシーと民族問題であり、第二には、イギリス・デモクラシーは、宗教上の自由の問題と緊密な關係があつたが、ドイツ・イタリー等では、進歩・民族・デモクラシーは、世俗的信仰の對象でしかなかつたという點であり、第三に、イギリス自由主義者の經濟理論は、基盤社會の認識にもとづいていたが、ドイツ等では、更に日本では、封建的經濟から直接に、獨占資本主義段階に移行したのであり、第四は、イギリスにおける industrialization は、地方分權的、遠心的傾向であつたが、ドイツ等では、それは、中央集權的求心的傾向であり、顯著なコントラストをなしており、クロスマンによると、「ファッシズムは、まさに十九世紀の經濟發展の際に、遠心的な自由主義的傾向が產業的基盤の上に立つて現れ出なかつた國々において、出現したのである。」（一七一頁）と、述べている。この章においては、「イタリーの似而非自由主義」「ドイツ統一問題」「戰前ドイツの浪漫派と民主派」「理想主義と政治哲學」等を論じているが、紙面の都合上割愛したい。第八章社會主義とロシア革命では、「マルクス並びにエンゲルスは、ロックないしその他のいかなる自由主義者にもまさつて、マルクス主義運動並びにその反對者の運動に影響を與えた。彼らを飽いた社會主義は、ハムレット拔きのハムレット劇に等しいものである。」（二〇四頁）として、ヘーゲルの辨證法、マルクスとヘーゲル、階級鬪爭、プロレタリア獨裁、マルクス主義者とマルクス主義を說き、ロシア革命に及んでいる。

四

第九章ファッシズムでは、まず「國際連盟の失敗」から說き起している。すなわち、ヴェルサイユ體制は、「債務國たるドイツやイタリーのような國々は不可避的に、みずからをヴェルサイユの銀行家たちの金融植民地であると感じた。また一方ロシアは、連盟を資本家の共謀であるとみなした。」（二四三頁）からであるとしている。次いで、ファッシズムを、イタリー型とドイツ型の兩者を對比しつつ、「集團平和主義の神話」、「右翼革命・ファッシストの神話」、「民族社會主義者の神話」、「權力の掌握」、「一黨制國家」と觀點を轉じつつ論じ、一九三五年以降、西歐デモクラシーとファッシズムの「理念の均衡」が行われた過程を簡明に展望している。

最後の第十章は、「世界政府か全滅か」という現在的課題に對してアプローチする。まず第二次世界大戰が、眞の世界戰爭であり、その兵器の種類、使用から論じても全滅戰爭の樣相を呈していた點を指摘する。しかして、「第二次世界大戰の幕切れにおいて提起された問題は、世界國家の必要性であり、……その達成の不可能性であつた。要するに、この當時世界國家の基礎となりうる三つの哲學——いなもつと適切にいえば三つの考え方——が、あつた。すなわち、それは、十九世紀の最後の生き殘りであるアメリカのデモクラ

シーの考え方、ロシアの共産主義の考え方、並びにイギリスの社會民主主義の考え方である。」（二九三頁）といい、「アメリカ的生活様式」、「共産主義と世界秩序」、「イギリスの社會民主主義」に論及している。この章では、クロスマンの抱懷するイデオロギーが散文的に隨所に現れている。すなわち、「純粋に人間の幸福――最大多數の最大幸福――という點から考えて、西歐人に對して、社會民主的な生活様式を、アメリカの自由企業ないしロシアの共産主義のいずれにもまして、すすめねばならぬということは、疑いがない。」であるとか、「アメリカの政治の激しいダイナミックスから、スウェーデン、ニュージーランド、あるいは戰後のイギリスのごとき平和で謙讓な精神をほとんど期待しえない。」とかいい、更に、「社會民主主義は、……宗教改革とともにはじまった非常に長い發展過程の窮極である。」と、社會民主主義的生活様式の價値を高く評している。

五

以上によつて、いささか冗漫に墮した感があるが、本書の要點をピック・アップしつつ概觀してみた。本書は、さきに筆者ものべ、かつまた譯者小松教授も、「あとがき」に指摘しておられるように、サブタイトルに「A History of Political Ideas and Political Practice」と附されているごとく、政治理念と政治的實際の相補關連を解明する意圖をもつて書かれたものである。故に、政治理論書というよりは、むしろ「政治思潮史」ともいうべきものであろう。小松氏が「著者は、一般の思想史家と異つて、論究の對象を著名な思想家に限定せず、政治理論を實踐の場で整理したり、またこれを制度として定着させようとした政治家にまでひろげている。政治思想を單に理念史的に抽象的な論理の系列において眺めず、これを政治制度との關連の下に解明しようとする立場からすれば、論究の對象がこのように廣汎になることは當然であるが、このような思想史の企圖は、誠にユニークなものであり、これが本書の價値を高からしめていることは、いうまでもない。」（三〇六頁）と評されているが、全く同感である。

譯文も、筆者が原典と對照して讀んだ範圍においては、判然としており、譯語も專門化されて、頗る適切であると思われる。ただ、氣にかかることは、最後の「イギリスの社會民主主義」という言葉であるが、一般に社會民主主義という言葉は、筆者の認識しているところでは、マルクス主義の系譜に屬する大陸の思潮であり、イギリスにおいては、むしろ民主社會主義という固有名詞が、日常化されているのではないかと思うのである。

クロスマンが、Social Democracy として扱つている內容は、いわゆる Democratic Socialism の問題であるからである。

いずれにしても、多角的な觀點から、それぞれの政治的實踐の場と、政治理念を手際よくまとめた本書は、廣く讀者層に浸透してますます價値を增加するものであると信じ、さらにわが國の政治學徒にクロスマンの思想史觀を普及させる媒介の勞をとられた小松春雄教授の譯業は高く評價されるべきであると思う。（岩波書店發行二五〇圓）（十一月十五日）

（多田真鋤）